

夢窓幼稚園 第64号

2024年 2月 29日

大学生の頃より 歳を重ねたら、いつの日か「しよう！」と 思っていたことがあります。

それは いつかやってくる 自分の葬儀のときの 参列して下さい。た皆さまへのお礼の「あいさつ」を 書き記しておくということです。

江戸時代の歌舞伎作家 鶴屋南北のように です。

“あら あら 縁起でもない”と 叱られそうですが

・・・世界中で 紛争や戦争、自然災害、
マザーアースの疲弊困憊の状態・・・等を考えると、
私たちの生命は いつどうなるやらと思わないうちは
いられない状況です。

ですから 葬儀のあいさつ文は、そんな事態に備え
一刻も早く・・・との思いから・・・と思いきや、そういう
訳では ありません。

あの世を求めてのことでも ありません。もちろん・・・まだ、
この世で何を一番大切にしたいのかを 確認したいが
ための作業なのです。

これから生まれてこようとしている生命を含め、共に過ごす
子どもたちの未来がゆたかであってほしいとの願い
からの作業でもあるのです。

年度のラストシーンが 迫ってくる頃になると、子どもたち
それぞれが 本当に大きくなった！と 思います。

幼い子どもたちが 自らを成長させていく輝きの姿ほど
美しい光景はないのかもしれない。

長年いっしょに過ごしてきた 年長の子どもたちには、
その数年の間に 見違える程 成長した 言葉や行動か。

姿に触れると、胸が熱くなることもあります。

そんな子どもたちのためには、そして子どもたちが
生きる社会の未来のために「今 私たちがしなくては
いけないことが もっとあるはずだ」「自分たちは
託されているはずのことが、まだ ちっとも果たせては
いない」・・・と、自分のどこか奥深いところから
そんな思いが立ち昇ってきます。

なせば成る なさねば成らぬ 何事も
成らぬは 人の なさぬなりけり

あの名君の言葉が響いてきます。

私たちが、何を一所懸命「なさねばならない」のか
考えたいと思います。

「夢と願い、それら以外に未来を作り出すものはなし」と
とするなら、子どもたちのモデルとしての私たちは、未来に
向けて どんな夢と願いを持っているのか、もう一度
確かめない訳には いきません。

そして、輝きの中で次の時へと向かっている子ども
たちには、あの詩人のように「どのような道を歩く
とも、いのちいっぱい 生きれば いいぞ」(相田みつを)
どの思いを持って、それぞれの背中を見守り送り出し
たいと思っています。

菜の花の季節の中で
園長 升光 泰雄

野原一面に広がる
輝く黄色を前に
一人ひとりが
うれしい春を迎えられますように
・・・と祈ります

